川崎医療福祉学会誌　Vol. 14　No. 2　2005　429–436

資　料

社会福祉施設を活用した基礎看護学実習Ｉの学び

浜端賢次[*1]　兼光洋子[*1]　石本傳江[*1]

はじめに

近年，人々の保健医療福祉へのニーズが増大する中，専門職としての看護職育成にも様々な能力が求められている．看護系大学は2004年現在，全国に120を数えるようになったが，各大学とも人々のニーズに対応すべくカリキュラム検討を重ねている．一般に，看護基礎教育においては講義・演習を中心とした教育内容の他，実習教育が極めて重要な位置を占めている．これまで実習教育では，病院を中心として看護学実習が展開され，看護師育成を実施してきた．しかし，社会の要請は時代とともに大きく変化し，来るべき21世紀の超高齢社会を目前にして看護職の役割は病院から地域へと拡大している[1)]．また，「看護学教育の在り方に関する検討会」でも，今後は「在宅や社会福祉施設での看護学実習が重要となる」と報告書[2,3)]に示されている．

このような中，本学科は平成７年（1995年）に医療福祉学部の中に設置され，開学当初より川崎学園関連施設である社会福祉法人「旭川荘」（総合医療福祉施設）の協力を得て看護学実習を展開している．この点は本学の教育理念である「医療と福祉の両面から同時に対応できる人材養成」を目指すという考え方に依拠するものである．本学科でも指定規則等の改正に伴い，開学から現在まで４回のカリキュラム改正を行っている．基礎看護学領域においても，本年度より新たに「基礎看護学実習Ｉ」が開講し，従来から行われている「福祉施設での看護学実習」を引き継ぎながら現在に至っている．そこで，本稿では社会福祉施設で展開する「基礎看護学実習Ｉ」の評価を行い，学生の学びについて報告する．

研究方法

対象　　Ｋ大学保健看護学科２年次生65名

実習期間　2004年６月28日（月）～７月10日（土）前半，後半の２期

実習施設　老人保健施設：２施設，特別養護老人ホーム：２施設　計４施設

方法　　基礎看護学実習Ｉ終了時に提出した「実習自己評価表」と実習まとめレポート「看護学実習を終えて」を分析対象とした．「実習自己評価表」は５テーマ18項目についてそれぞれ５段階尺度（非常に良い，良い，普通，やや劣る，劣る）で得点化した．学生の実習まとめレポート「看護学実習を終えて」は，研究者３名により自由記述内容をKJ法を用いて看護に関する要素を抽出し，学習の全体的傾向を分析した．

本学における基礎看護学実習Ｉの位置づけおよび構造（図１）

本学では平成15年度のカリキュラム改正に伴い，基礎看護学領域の実習単位数と実習時間数が増加した．改正前は「基礎看護学実習」という名称で３年次生春学期に２単位の実習を行っていたが，改正後は「基礎看護学実習Ｉ」（１単位）ならびに「基礎看護学実習II」（３単位）という構造へと変化した．これに伴い，「基礎看護学実習Ｉ」は２年次生春学期，そして「基礎看護学実習II」は２年次生秋学期へと開講時期を変更している．また，基礎看護学領域の関連科目として，「看護ケア方法論Ａ」（１年時生秋学期），「看護ケア方法論Ｂ」（２年次生春学期），「看護ケア方法論Ｃ」（２年次生秋学期）にて，基本的な基礎看護技術を教授している．このような中，本稿で取り上げる「基礎看護学実習Ｉ」は本年度（平成16年度）に初めて実施したものである．図１で学生の準備状況をみると，看護を支える専門科目（解剖学・看護生理学Ａなど）は終了しており，「対人関係援助論」も選択科目ではあるが実習開始時期ではほぼ終講に近づいている．また，看護技術でも「看護ケア方法論Ａ・Ｂ」にて，日常生活上の援助技術についてはほぼ学修している．一方で，看護学実習の学修状況を見ると１年次生秋学期に「ふれあい援助実習」（１単位）が終了しており，健康な高齢者とのふれあいは体験している．そこで本実習では，図１に示す４施設の協力を得て，健康障害を抱える高齢者に焦点をあて基礎看護学実習Ｉを展開した．

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科
（連絡先）浜端賢次　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学

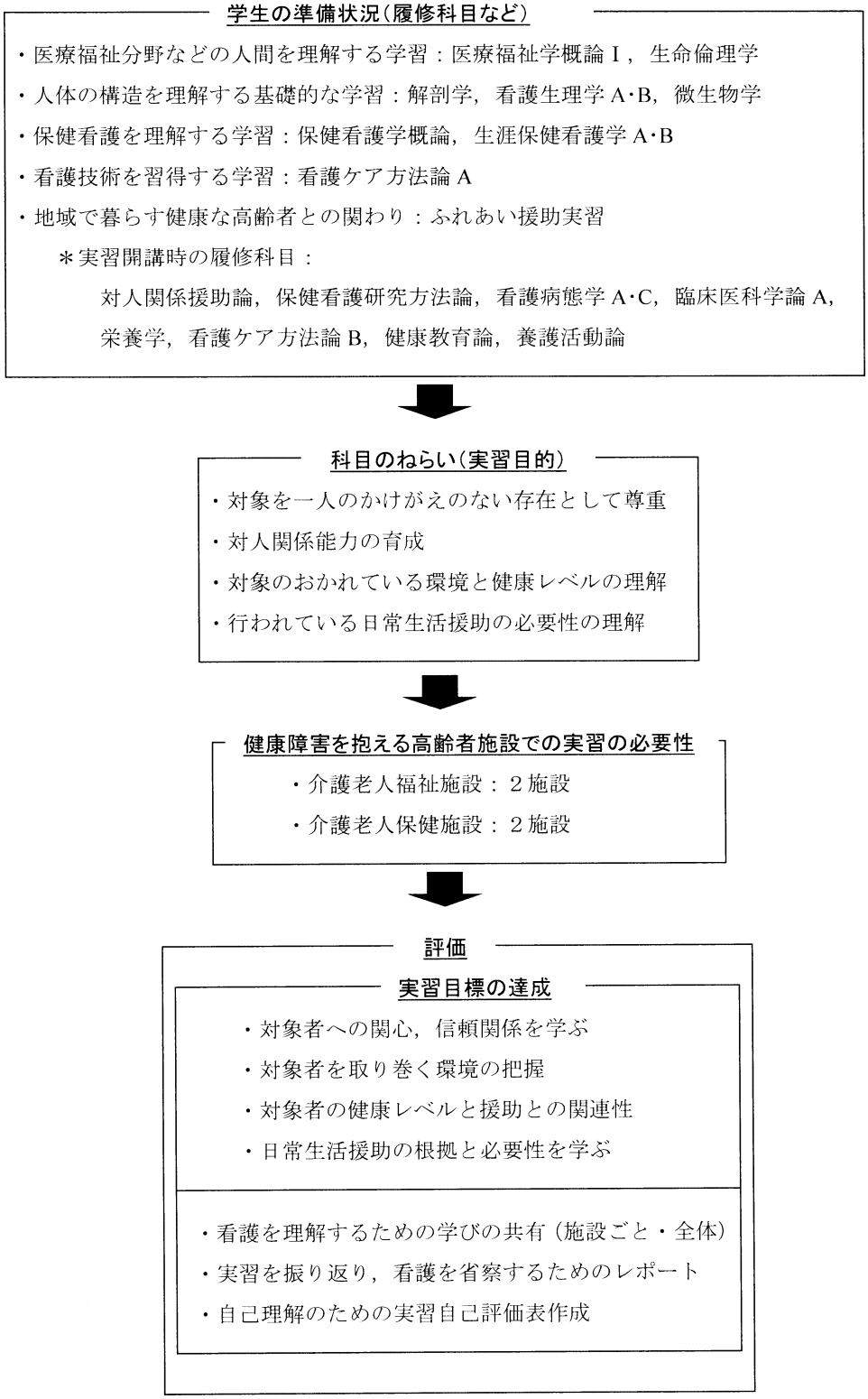

図１　基礎看護学実習Ⅰの構造

１．実習方法

１.１．実習施設への働きかけ

実習施設は「介護老人福祉施設」２施設（身体上の介護が常時必要で生活が困難な虚弱高齢者ならびに重度痴呆性高齢者に対して援助を行う）と「介護老人保健施設」２施設（看護や介護もしくはリハビリテーションを目的として医療と生活サービスを提供する）の計４施設で実施した．実習開始前は施設責任者（看護職）ならびに実習指導者と事前に打ち合わせを行い，実習目的・実習目標について実習指導上

表1　4日間の実習内容

＜4施設共通の実習内容項目＞	コミュニケーション，食事介助，排泄介助，入浴介助
＜各施設での実習内容＞	
【栄養援助】	水分補給，経管栄養見学，食事摂取量チェック
【排泄援助】	オムツ交換の実施，摘便見学，人工肛門（ラパック）の装着
	座薬挿入見学，膀胱洗浄見学，導尿見学，バルンカテーテル交換の見学
【清潔援助】	一般浴・特浴：洗髪・身体を洗う・移動・着脱，
	清拭，ひげそり，整髪，口腔ケア，義歯の洗浄，歯磨き
	爪切り，水虫予防，足浴，フットケア講習
	衣服着脱，浴室への移動の介助，誘導
【環境】	環境整備シーツ交換
【姿勢・体位・移動】	体位変換，ベッドから車椅子への移乗，車椅子・ストレッチャーへの移乗
	散歩，歩行介助，見守り
【コミュニケーション】	コミュニケーション技法演習，タッチング
【機能訓練・レクレーション】	カレンダー作り，色紙作り，お手玉，将棋，料理教室，ホーム喫茶
【季節の行事】	音楽療法の見学，七夕喫茶，七夕のかざりつけ作り，盆踊りの練習
	アクティビティケア（短冊、折り学、ぬり絵、七夕に関する話し、ラジオ体操、歌）
【その他】	申し送り・朝礼，リハビリテーションの見学，BSによる振り返り
【看護業務】	対象者の健康管理の実施（バイタルサインの測定，全身状態の観察）
	医師の診察介助，リハビリ看護，短期入所者のお迎え
	胃瘻交換の見学，経管栄養の実施，吸入見学，痰吸引の見学・実施
	薬剤の分類の実施，点滴の量と速度の点検
	褥瘡の援助見学（消毒・軟膏塗布）の見学，処置（褥瘡・かぶれ・表皮剥離）
	看護記録の記載の実施，職員会議への参加
【実習指導者ならびに教員の話】	「福祉施設の看護の考え方」
	（体験を基に事例をもらい、その場面を考え先生から学ぶ）

の齟齬が生じないよう説明と確認を行った．また，施設ごとで直接指導にあたる担当教員は，各施設の実習指導者と詳細な調整を何度も行い実習に備えた．

1.2．学生への働きかけ

実習開始前に実習オリエンテーションを実施し，以下の①から④の内容に沿って説明した．

① 看護学実習の意義（対人関係，ケアリングなどの説明も含む）

② 基礎看護学実習Ⅰ概要（実習目的・実習目標・実習方法など）

　実習目的「福祉施設の場における看護の対象を，生活者の視点から全人的に理解する．本実習では対象者を一人のかけがえのない存在として尊重し，対象者とかかわるなかで環境や健康レベルとの関連を知り，日常生活上の援助の必要性を学ぶこと」

③ 介護保険制度，医療保険制度，施設で行われる医療など

④ 各施設における実習内容および注意事項

1.3．実習展開

学生は月曜日から木曜日までの4日間を，各実習施設で看護職や介護職ならびに他職種と関わりながら実習を展開した．また，可能な範囲で一人の高齢者を受け持つことができるよう施設側に協力を求めた．なお，実習中は各施設に担当教員を配置し，施設指導者と協力体制を作り学生の指導にあたった．カンファレンスは毎日開催し，教員は必ず出席するといった形で実習での疑問点や問題点などの解決をはかるように努めた．前半・後半とも金曜日は大学内で各実習施設のまとめを行い，実習最終日は全学生で学びを共有した．

結果および考察

1．実習内容（項目別）

表1は，学生が4日間の実習で学んだ実習内容項目である．4施設に共通した実習内容項目は「コミュニケーション，食事介助，排泄介助，入浴介助」であった．これは，今回の社会福祉施設が高齢者の生活を支える場であったことと大きく関連している．施設によって体験できる実習内容には差はあるが，図1で掲げた「科目のねらい（実習目的）」の日常生活援助はほぼ実習で体験できていた．さらに，表1に施設内で行われている看護について示したが，施設内でも様々な医療が高齢者に提供されていることを学習していた．

2．学生の自己評価

2.1．自己評価項目の設定と内容

評価項目は実習目標と照らし合わせ，5つのテーマに分類し，さらに行動目標レベルの評価項目を全部で18項目設定した．実習評価項目の詳細については，表2に示す通りである．

2.2．評価項目別の学生の自己評価

(1) コミュニケーションについて

図2に示す通り，全体で80%以上の学生が「非常に

表2　実習自己評価表

コミュニケーション	1．対象者との会話を通じて、対象者を知ろうとする
	2．対象者の話しを聴き、自分の考えを伝える
	3．対象者の立場で考え、目的を持って関わる
	4．対象者への理解を深める
	5．対象者の気持ちを思いやる
環境	1．対象者が生活している物理的環境（採光，照明，色彩，音，臭い，室温など）を述べることができる
	2．対象者を取り巻く人為的環境（同室者，職員，家族との人間関係など）を述べることができる
	3．対象者の日常生活と物理的環境との関連を説明できる
	4．対象者の日常生活と人為的環境との関連を説明できる
援助の意味	1．対象者に行われている日常生活上の援助を知る
	2．対象者の健康レベルを知る
	3．対象者に行われている日常生活援助の個別性を知り，その人に必要なニーズを理解する
	4．対象者の健康レベルと援助内容（目的・方法・留意事項）との関係を述べることができる
実習態度	1．看護学生として，ふさわしい身だしなみや言葉遣いができる
	2．日々のカンファレンスに積極的に参加することができる
	3．まとめのグループワークに積極的に参加することができる
記録	1．誤字脱字がなく，用語を適切に使用することができる
	2．実習記録物の提出を遵守することができる

＊評価点　（5　非常に良い，　4　良い，　3　普通，　2　やや劣る，　1　劣る）

良い」または「良い」と評価していた．対象者の生活に沿って共に行動することで対象者に関心を持つことはできたが，初めは沈黙になると焦ってしまう場面が多く，多くの学生が信頼関係を築くことの難しさを体験したようである．しかしながら，プロセスレコードによって対象者との関わりを振り返ることで自己を省察し，「この方を知ろう」「知りたい」「もっと知りたい」「何かして差し上げたい」という気持ちが沸き，心を開いた関わりを持てたことで，対象者の方が様々な場面や方法で「応えてくれた」と感じ取ることが出来る様になったと思われる．最終的に学生は対象者の方々と「近くになれた」と評価していた．学生は対象者を知ろうとする気持ちが強く，対象者の気持ちを考えながら実習を展開していたと考えられる．この段階では「対人関係援助論」の講義も同時に行われており，学生は大学で学んでいたことを活用しながら興味深く高齢者と関わることができたのではないかと思われる．また，「他者とどのように関わったら良いのか」という学生の問いに対しても，教員や実習指導者が実際のモデルとなり，その姿を見て学生はコミュニケーションを深めていったと思われる．

（2）環境について

施設における実習目標は「物理的環境」と「人為的環境」について学習する目標を設定した．しかしながら，図3に示すように「非常に良い」と「良い」と答えた学生は40～70％程度にとどまった．これは，各施設とも痴呆症状を抱える高齢者が影響しているのではないかと考えられる．痴呆症状のある方は，ベッドサイドに色々と飾ってもタンスの中にしまう傾向のある方もいた．また，他室に入り，物を動かしたり物をしまうといった行動も見られていた．このようなことから，本人も被害に合う人もベッドサイドに生活感が現れにくく，行事等で貼ってあった写真などもタンスの引き出しへと導かれてしまう．

また，物理的環境よりも人為的環境の方が実習達成状況が良かった．学生は高齢者とコミュニケーションを深めていく中で，同室者との不協和音を聞く機会も少なくはない．今回も学生の受け持ちの方が同室者のことを訴えて来たため学生自身も悩み，対応困難な問題としてカンファレンスにあがっていた．カンファレンスではこの内容を学生全員で共有し，実習指導者と教員から助言を受けていた．同室

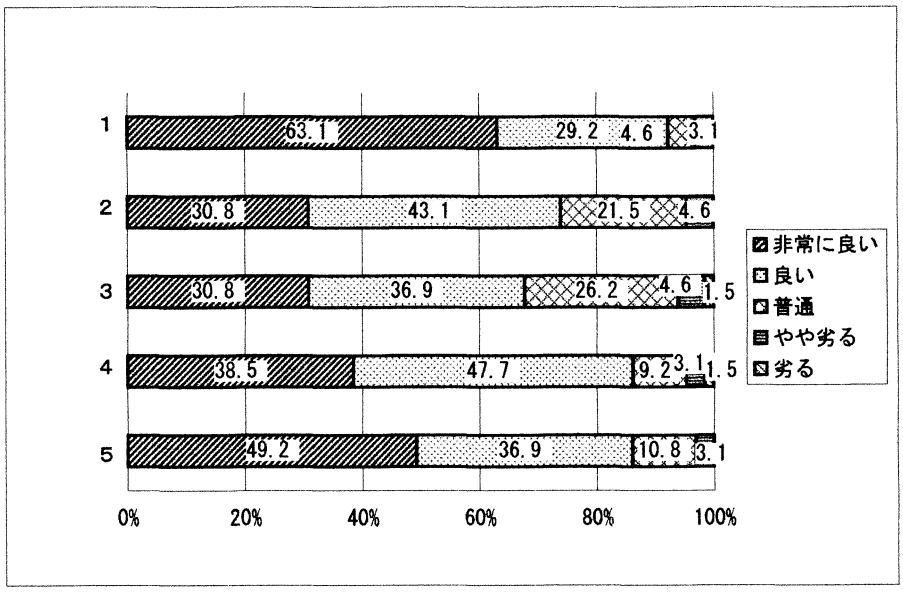

図2　学生の自己評価（コミュニケーション）

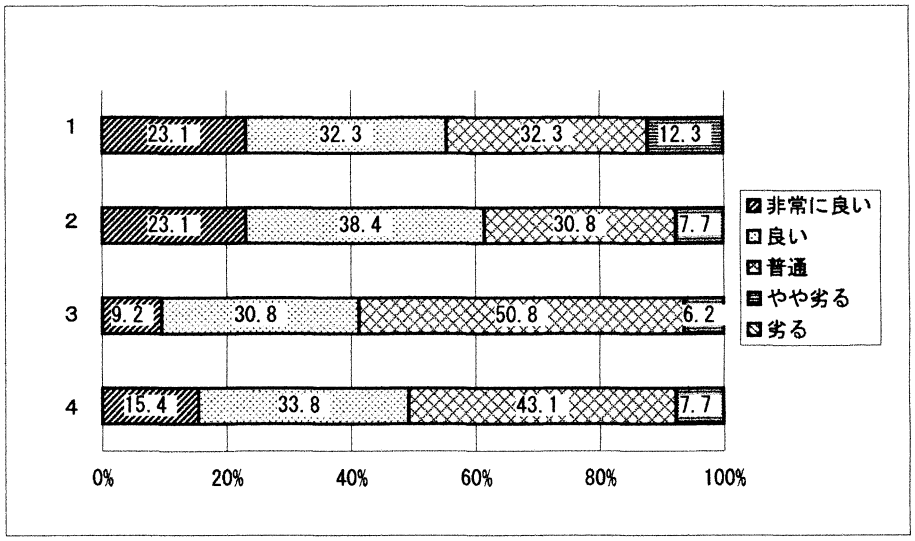

図3　学生の自己評価（環境）

者との関係だけでなく，学生本人も対象者の方の大きな環境因子になるということを学んだ．人は環境の中に生きており，「環境とプライバシー」，そして「人間の尊厳」に環境が影響していることが少しずつではあるが理解できたと思われる．

（3）援助の意味

図4に示すように，実習施設で行われている援助については約90％の学生が理解できていた．対象者に行われている日常生活上の援助については，看護職や他職種の方と共に基本的援助を体験し，援助の必要性を考えることができたと思われる．また，健康レベルについては解剖学・生理学・病態学・薬理学等と合わせて考える機会となり，約80％の学生が健康レベルについて考えることができたと答えていた．しかしながら，「援助における個別性」や「援助と健康レベルとの関連」については60～70％の理解にとどまっていた．この部分は施設で関わらせていただいた高齢者の健康レベルに差があることが予測されるが，基礎看護学実習IIの課題として次ぎの実習への動機付けとしていきたいと考えている．

（4）実習態度・記録

実習全体を通して，各自が目的を持ち前向きに取り組むことができていた．今回は出欠席も特に問題はなかった．図5に示すように，カンファレンスにおいても積極的に人と意見交換することで，次の自己の課題が明確になっていったと思われる．また，

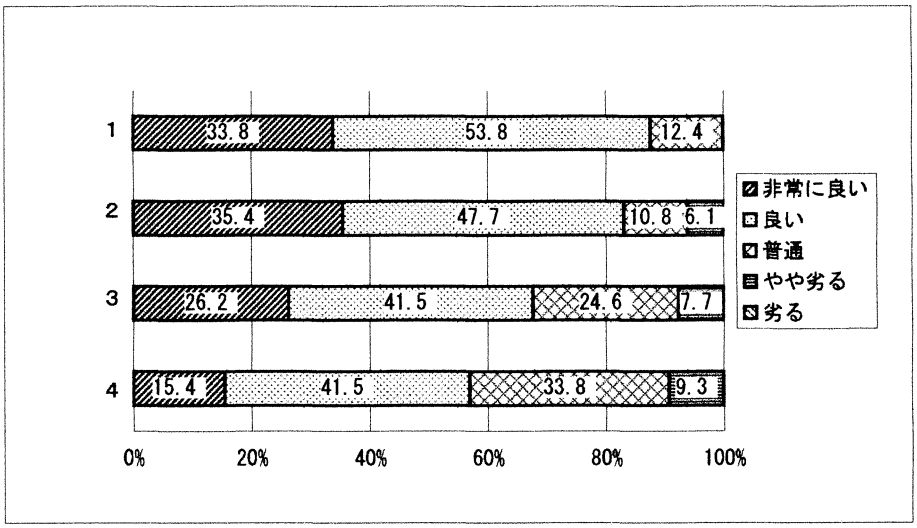

図4　学生の自己評価（援助）

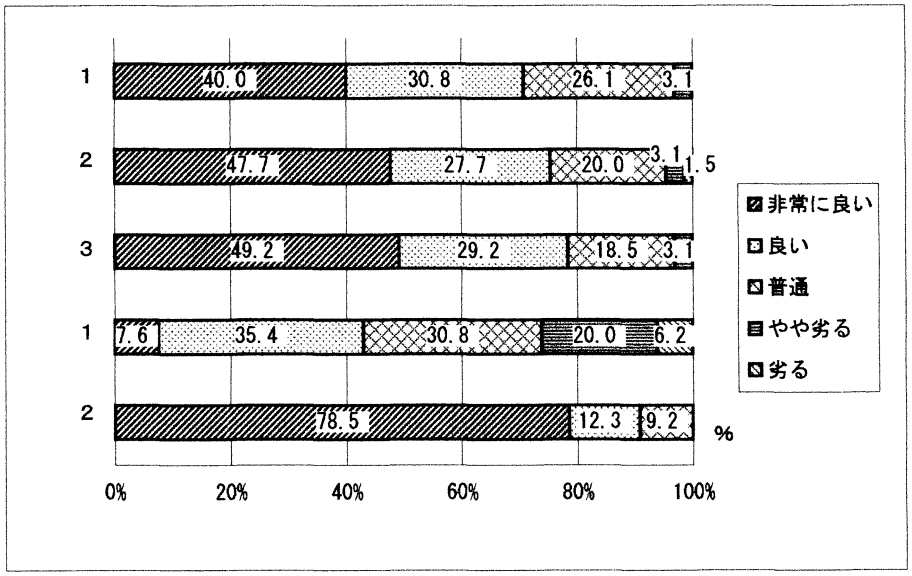

図5　学生の自己評価（実習態度・記録）

実習指導者からも主体的に実習に取り組んでいたという評価を頂く場面も見られていた．一方で，記録物の誤字脱字が多いことと身だしなみや言葉遣いに関しても，それぞれの課題が見えており，学生自身が気づき修正する努力を行う姿が見られた．

3．学生の実習まとめレポート「看護学実習を終えて」

レポートの記述内容を整理・検討した結果，以下のように90ラベルから8カテゴリーが抽出できた．

(1) コミュニケーション

「会話ができなくてもタッチングを行ったり目を合わせたり隣に座るといったノンバーバル的なことであっても立派なコミュニケーションになる」，「1人の方と関わっていくと日に日にいろんな話が聞け，その方も伝えたい意志が強いことがわかった．聞く耳を真剣に持って関わることが大切だと思った」，「対象者の方とちょっとした話を毎日続けることで，より深い話をしてくださるようになり，心を開いてくださった気がして嬉しかった」「受け持ち高齢者の方と4日間を通して，共に暮らしたという感じを持った」

(2) 対象者の理解

「自分で作ったことを忘れていたが，心から感謝してくれている笑顔や言葉に感動した」，「対象者が嫌がることには理由があるので，その理由を探すことが大切」，「Cureと Careの両面をみていくことが大切だと感じた」

（3）家族の力

「家族の方が面会に来ると表情が出たり，食べるようになったりした」

（4）観察と情報収集

「ほんの小さな傷や体の変化でも報告をしており，観察の大切さを知った」,「対象者一人一人の情報を把握していないと，その人へのベストは介助はできず何も知らないで介助することは怖いものだとわかった」,「看護は洞察力と観察力が大切（自分自身で感じる）」

（5）個別性と援助の根拠

「全ての老人をひとくくりにまとめてはいけないと学んだ」,「初めは環境や援助をそのまま受け止め，こういう看護を行っているということで終わっていたが，カンファレンスで話し合いそこにはそれぞれ違った対象者がいるのだということに気づかされた」,「何故その人にその援助・処置が必要なのかという疑問を常にもてるようになり，より深く対象者を知ることができるようになった」

（6）他学生との学びの共有

「自分に気づかなかったことを実際に試してみたらうまくいったと言っていたので人の意見を聞き入れ応用していく大切さに気づかされた」

（7）手本となる指導者

「声かけのしっかりできている職員の方を自分は見習いたいと思った」,「対象者と職員の方との関わりがとても深い」,「職員の誰に聞いても対象者一人一人のことをよく教えてくださり，職員の方は一人一人のことをよく把握していると思った」

（8）気づける感性

「床頭台の上にある物は片づける性格だったが，一緒に作成した色紙だけはしまわずに飾っておいてくれた」,「同室者同士がお互いの色紙を見せ合い，人為的環境（同室者との関係）に影響を与えることができたと思った」.

上記の結果から，学生たちは4日間の社会福祉施設での実習で，対象者，施設長，実習指導者，職員，教員やグループメンバーと出会い，充実した実習を行うことができたと思われる．全体のまとめでも「モデルになる指導者と出会えた」という声が多く，学生は「充実していた」「楽しかった」と実習全体を評価していた．学生たちはこの実習を振り返って「共に暮らしてきた」と表現していたように,「知識（頭）」と「技術（手）」を綯いあわせる「心（関心）」を意識できた実習であったと考えられる．

終わりに

社会福祉施設での看護学実習は，学生が「共に暮らしてきた」と表現したように，ゆったりとした時間の中で生活に焦点をあてて学習することができる．このことは，知識と技術を綯い合わせる人間への「心（関心）」を育み,「看護」が生活に根ざすものであるということを理解するために貴重な体験であるといえる．これから看護学を深めていく入口にある基礎看護学実習で，社会福祉施設を活用することは上記の観点から意義があると思われる．

最後に，基礎看護学実習Ⅰにご協力賜りました実習施設の関係者の皆様，実習担当教員の先生方ならびに学生の皆様に心より御礼申し上げます．

文　　献

1）平山朝子：「看護学教育の在り方に関する検討会報告」をめぐって．看護展望，**27**(7)，44–53，2002
2）「看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標」報告書：文部科学省，平成16年3月26日
3）「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」報告書：文部科学省，23，平成14年3月26日

（平成16年11月30日受理）

The Learning of Practical Clinical Nursing I in Nursing Home

Kenji HAMABATA, Yoko KANEMITSU and Tsutae ISHIMOTO

(Accepted Nov. 30, 2004)

Key words : fundamentals of practical clinical nursing, communication, student learning, care of the client's environment, evidence based nursing

Correspondence to : Kenji HAMABATA Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.14, No.2, 2005 429–436)